

～輝きの子育て～

日本から失われた道徳心

年始から能登地方の大地震、日航機と海保の航空機の衝突と大きな災害が発生しました。この災害で亡くなられた方々に謹んで哀悼の意を表しますと共に、今なお避難生活をされている方々には応援のメッセージをお送り申し上げます。

昨年起きた政治とカネの問題、ダイハツ、ビッグモーターの不誠実、不正直な事件は、程度の差はあれ、ほとんどの政治家、企業、各種組織で行われているのではないかと想像してしまいます。

どうして日本人は、こんな情けない民族になってしまったのでしょうか。

日本人の道徳については、古くは3世紀「魏志倭人伝」に「盗みや訴訟をせず礼儀正しい」と記載されており16世紀にキリスト教の布教に来たフランシスコ・ザビエルは「礼節や名誉を貴ぶ」と、又、18世紀に長崎の出島に来たスウェーデン人医師ツェンベリーは「率直にして公正」と述べています。

幕末に日本修好通商条約を結び6年近く日本に滞在した米国外交官タウンゼント・ハリスは「日本は世界中のどの国とも違い、質素と正直の黄金時代にある」と述べています。

日本は高貴な国だったのですが、明治時代以降、植民地主義の波に巻き込まれ、ついには太平洋戦争を戦い、国土は焦土と化し、貧者ばかりの国になってしまいました。それでも道徳は大きな影響を受けずに来ました。

東京大空襲や原爆投下といった戦争犯罪を正当化すべくGHQ（日本を占領した連合国軍総司令部約7年間日本を統治した）によって、日本の歴史や古くからの美徳や伝統や価値観は全部否定されました。

戦争に負けて、茫然自失の中にあった日本は、当時の識者の相当な抵抗にも拘わらず、戦前の価値観の全否定とアメリカの信じている民主主義を憲法として受け入れてしまいました。

さらに、日本人の道徳心に追い打ちをかけたのが、1990年代の新自由主義（グローバリズム）でした。市場原理、規制緩和、民営化、株主中心主義、成果主義等々によって、公共サービスを削減し、金持ちをさらに金持ちにし、貧しい者をさらに貧しくする結果を引き起してしまいました。弱肉強食の競争社会になり、最も金銭崇拜から遠くにいた我が国は金銭至上主義になってしまいました。この当時、私も会社でグローバリズムを強力に推進していましたが、今は大いに反省しております。

正直や誠実は隅に追いやられ、人々のやさしさ、思いやり、穏やかさ、卑怯を憎む心、他者への深い共感など日本を日本たらしめてきた誇るべき行動規範は忘れられました。このように乱れてしまった道徳心は一朝一夕には良くならないと思います。

今から日本は2050年ぐらいを目標とした長期の目標を掲げて一步一步良くしていかなければならないと思います。2050年には今の高校生は40代、20代の若者は50代、保育園児は20～30代になります。道徳心だけでなく、科学技術の面でも三等国に落ち込んでいる日本を再構築し日本人の底力を見せ、道徳的で平和な国を作ってほしいと念じています。（2050年には私は110歳なので）

ここに孟子の言葉が参考になります。

「人 恒に言あり、皆曰く 天下国家と。

天下の本は国にあり。国の本は家にあり。家のもとには身にあり」

「人はよく“天か国家”と口にするが、天下の本は国にあり、国の本は家にあり、家の本は自分自身にあるのだ。天下国家を立派にしたいなら、まず自分の身を修めねばならないということである。」

肝に銘じたい言葉です。

片野 英司

参考 「この国民にして この政治あり」 藤原 正彦 寄稿
(産経新聞 2024年1月7日)